

ベルクソンと否定の問題 (3)

—反自然と抗議⁽¹⁾

高坂 絢乃

はじめに

前二稿⁽²⁾では、われわれは、ベルクソンにおける「否定」の概念について検討し、ベルクソンの言う「否定」には、知性的な否定と直観的な否定があることを見出した。一方でベルクソンは『創造的進化』においては、彼が批判すべき否定について、無の観念や弁証法とも絡めて丁寧に説明しているが、他方で、『思想と動くもの』においては、否定の持つ直観的な能力について説明していることが確認された。『道徳と宗教の二源泉』においても、物質的障害を一挙に取り除く単純な否定というものも確認された。

本稿では、実定的 [positif] なものを打ち破るものとしての否定の力を明らかにしたい。そこで、『道徳と宗教の二源泉』でいう閉じられた社会を打開する力としての、「反自然」あるいは「抗議」としての否定の力を整理しよう。否定は、実定的なものや閉じられたものを流動化する力を持ちうるのだろうか。

『道徳と宗教の二源泉』では、たしかにタイトルの通り道徳と宗教について論じられてはいるのだが、ベルクソンは具体的で実践的な道徳について主張しているわけではない。そうではなくて、社会のなかで現に働いてしまっている力について考察している。社会のなかで現に働いてしまっている力は、ときには責務であったり習慣であったりとさまざまではあるが、われわれがふだん生活しているなかでは立ち止まって考えることの少ないものである。

われわれの社会は、自然の要請にしたがって形づくられ、その体制を維持しつつづけている側面もたしかにあるが、変わることなく続いていくであろう社会の形というものはないだろう。それは、すべてが持続しているから、と言うこ

ともできるだろうし、しかし、自然に逆らって社会を形づくろうとしている目には見えない力が働いているから、とすることもできるかもしれない。社会で実際に働いている力のうち、「否定」と関係が深いもの、すなわち「反自然」と「抗議」について本稿では明らかになるだろう。

1. 否定と反自然

現に働いている否定的な力として、まずは「反自然」が挙げられるだろう。「反自然」とは、これから引用する『道徳と宗教の二源泉』p.55でベルクソンが直接用いている用語ではないのだが、この語で示されるものに該当しうることがら、ベルクソンの著作には提示されている⁽³⁾⁽⁴⁾。本節ではこれに関するベルクソンの扱いを中心的に見てみよう。

反自然は、文字通りに捉えると、自然に反するものであり、否定的なものを含み、ベルクソンが排除しようとした否定のネガティブな要素がまず頭に浮かぶかもしれない。しかし、前稿までで詳しく見たように、「否定」と一口に言っても、ベルクソンが否定的な評価を与えている否定と、肯定的な価値を与えていたり、あるいは特異な力を認めている否定が存在する。反自然という否定的な力に対しては、ベルクソンはどのような評価を与えているのだろうか。

そこで、否定と反自然を論じるにあたって、まずは、ベルクソンが、われわれ人間と社会と自然との関係について述べている部分を確認しておこう。以下の引用は、『道徳と宗教の二源泉』第1章「道徳的責務」のなかの「前進」という小見出しがつけられた文章のなかであり、社会と知性との関係を論じる文脈で出てくる。

(…) 自然は、ある程度までは社会的生の知性による拡張を予見していたとしても、それはごく限られた拡張でしかなかった(…)。この拡張の結果、もとの構造がついには危殆に瀕するなどということ、自然が望んでいたはずはない。自然は万事手抜かりはないが、しかもまたはなはだ瞞されやすく、自然が人間に出し抜かれた例はたくさんある。(DS 55)

自然はわれわれ人間の社会が閉じた社会であることを望んでいたにもかかわらず

らず、自然から生み出されたはずの知性によって、それが乗り越えられてしまう危険性が出てきた。ここでベルクソンが言う「閉じた社会」とは、「他の個人を締め出すことを本領とし」(DS 25) ているもので、「開いた社会」とは「人類全体」(DS 25) を目指すものである⁽⁵⁾。自然が人間に出抜かれてしまう例として、ベルクソンは、人間における生殖と性行為との分離を挙げている。また、「人間が、社会の連帯性を人類愛 [fraternité humaine] へまで伸ばしてゆく場合」(DS 55) には、生殖の場合とは意味が異なるけれども、「自然の裏をかく [trompe la nature]」(DS 55) という点では、変わらないことを主張する。

『道徳と宗教の二源泉』においては、この「人類愛 [amour de l'humanité]⁽⁶⁾」が重要なテーマとなっている。ベルクソンは、「愛」とひとまとめに呼ばれているものには、三つの種類があり、そのうち「人類愛」だけが自然が意図したものではないことを述べている。愛の三つの種類とは、家族愛 [amour de la famille]、祖国愛 [amour de la patrie]、人類愛 [amour de l'humanité] である。前の二つは、閉じた社会を維持するために自然がわれわれに要請したものであるが、人類愛だけは人類を超えることをめざすものであり、閉じた社会に反している⁽⁷⁾。

ベルクソンの哲学は、『創造的進化』に見られるように、生命進化をエラン・ヴィタルという生の推進力によって貫かれているものとするところからも分かるが、一見すると自然的であるかのように思われる。主にハチなどの膜翅類に見られる本能が支配する社会構造と、われわれ人間に見られる知性が支配する社会構造とを分析し、本能と知性それぞれの記号（われわれにおいては言語）の分析も行っている。

われわれ人間の知性が、完全に自然の意図を越え出ることにはないにしても、自然が望んでいたよりも社会を拡張することができたことが確認できた。自然が要請した「閉じた社会」に完全に反対するようなかたちで「開いた社会」へとわれわれ人間が進んでいるとは言いがたい。そして、ベルクソン自身も、われわれの社会は、「閉じた社会」と「開いた社会」の中間段階であることを示している⁽⁸⁾。

自然がわれわれに要請した「閉じた社会」を完全に脱するには至らないが、ベルクソンは或る政治思想に「反自然」的な要素を見出している。その反自然

的な政治思想とは、一体何であろうか。以下の引用からそれが確認できるだろう。

実際、民主制こそは、ありとあらゆる政治思想のうちで自然からもっともかけ離れたものであり、「閉じた社会」の条件を——少なくともその意図のうえて——越えている唯一の政治思想なのである。(DS 299)

ベルクソンは、自然から一番かけ離れていて、そして「少なくともその意図のうえて」と注意を促しながらも、「閉じた社会」の条件を超えるものとして民主制を挙げている。自然が要請した社会のあり方、つまり自然が好む「閉じた社会」を超えるものとして、ベルクソンは民主制を評価しているのである。石井敏夫は、この「自然から最もかけ離れた」(DS 299) 政治思想について『『私たちの自然本性』の裏をかく技術としての政治⁽⁹⁾』という論文で言及しており⁽¹⁰⁾、「政治はそれらの問題に関しては、自らを『私たちの自然本性』の裏をかく技術として位置付けることができ、自らをそのような技術として行使することができる⁽¹¹⁾」と述べている。

自然の裏をかくものとして、反自然的なものとしての政治思想を確認したうえで、では、反自然的な性格を持つこの民主制という政治思想は、どのようにしてわれわれ人間の社会に生まれてきたのだろうか。民主制がどのようにして、われわれ人間の社会に登場したのかをベルクソンが示している箇所がある。それが、先の引用の少しあとになる、以下の引用である。

まず、民主主義が世に持ち込まれたのは、何よりもまず抗議 [protestation] としてだった。(DS 301)

ベルクソンは、いまのところ一番開かれた社会に近いものとして民主主義を挙げている。その民主主義は「抗議」として現れてきたというのである。抗議としてわれわれの社会に持ち込まれるとは、どういうことだろうか。抗議とは、一体何なのであろうか。

閉じたものを開くものとして、自然から遠ざかろうとするものとして、抗議が現れてくるのだ。抗議することとは、すなわち既存の社会体制を否定すること、異を唱えることであると言い換えられるだろう。では、既存の社会体制を

否定すること、既存の社会体制に対立することは、弁証法的なのだろうか。いや、そうではなくて、反自然的な抗議というものは、もっと別の力があるはずである。自然に逆らうこと、反自然的な抗議には、閉じたものを開こうとする力が備わっていると言えるだろう。現に、抗議として世に持ち込まれた民主主義は、自然からもっとも離れており、そして閉じた社会の条件を超えているものなのである。

または、民主主義の、抗議として社会にもたらされた側面と、反自然的な否定の側面に注目してみよう。すると、前々稿で明らかになった、否定の持つ、交代物を暗示させるような性格が見えてこないだろうか。既存の社会体制を否定すること、抗議することによって、既存の社会体制ではないものが暗示されてはいないだろうか。そこでは、目指すべき社会の在り方が暗示されているのである。いや、実は目指すべき社会の在り方などというものはなく、われわれが自然の要請に従ったり逆らったりしながら進んでいくであろう、われわれが創造していくであろう社会の方向が暗に示されているだけなのである。抗議することによって現在の社会を否定し、そして否定することによって取って換わられるべき別のものを暗示している。これはたしかに、他者をめざす警告であって、ある意味ではその社会の成員全体に対して警告しているのかもしれない。そこにはもちろん否定している本人も含まれているだろう。

『道徳と宗教の二源泉』において、ベルクソンは、民主主義を自然からもっともかけ離れている政治形態として示しているが、だからと言って、それが到達点ではないし、社会も生成していくものと考えれば、完成形や到達点というものは存在しないのである。われわれ人間の社会は、閉じた社会と開いた社会のあいだにあり、開いた社会に向かって徐々に進んでいるのかもしれないが、だからと言って開いた社会こそが到達点なのではなく、開いた社会と一口に言っても、その実情はさまざまであろう。ベルクソンは、閉じた社会と開いた社会という区別においても、二元論的な区別ではなく、本能と知性というような「傾向性」を想定しているのではないだろうか。ベルクソンの創造的進化を考えてみても、エラン・ヴィタルという推進力によって生命は進化してきたわけであるが、われわれ人間も生命進化における到達点などではなく、「通り道」でしかない。

ベルクソンと反自然を考えるうえで、やはり民主主義と愛徳について言及されることがある。マリー・カリウが『ベルクソンとバシュラール』のなかで、ベルクソンと反自然について次のように述べている。

精神にはある種の「反自然 [contre nature]」が備わるとすら言える。というのも、民主主義を思考し、愛徳 [charité] を実践し、「よりよく息のつける社会 [société où l'on respire mieux]」のための諸条件を確立するには、自然とは反対方向へと進まねばならないからである⁽¹²⁾。

上記の引用からわかるように、カリウもベルクソン哲学における民主主義と愛（愛徳）は、反自然であることに注目している。自然のままに、自然の要請に従ってわれわれ人間が進んでいるならば、そこには開かれた社会ではなく閉じた社会が形成されるはずである。しかし人間は、原始的な社会では自然の要請に従って閉じた社会を構成していたが、そのうちに自然に逆らうようになる。自然に逆らって、民主主義や愛徳によって、開かれた社会を目指したのである。

「社会的なもの」に関しては、ベルクソンが『創造的進化』のなかで「否定」の批判をする際にも、注目すべき記述が見受けられる。それは、「否定がめざすのはだれかであって、純粹に知的な操作のように単に何かをめざすのではない。否定の本質は教育的、社会的なものである」（EC 288）という記述である。

また、カリウが指摘するように、ベルクソンにおける「反自然」の要素と、抗議として出現してきた民主主義に対する記述は、先の章でも確認したとおりである。

2. 抗議

前節において、現にわれわれの社会で働いている否定的な力を持つものとして、反自然的なものを考察してきた。反自然的なものとしては、ベルクソンの哲学のなかでは民主制と愛徳とがあり、それら反自然的なものが持つ特徴としては、それらがもともと自然が要請した「閉じた社会」を打ち破り「開いた社会」に至る力がある、ということであることが明らかになった。そこで、現に働く否定的なもの、反自然的な性格を持つ民主制が、社会のなかに抗議として

現れたことに注目し、本節では「抗議」に焦点を当てて考察を進めていこう。

反自然的政治思想である民主制が、抗議としてこの世に現れたことにベルクソンは注目しているが、彼の哲学はどのようにして始まったのか。『ベルクソン』においてヴィエイヤール＝バロンが一節を割いて、ベルクソン哲学の方法の否定的諸側面について分析している。「ベルクソンの方法の否定的な諸側面は本質的なものである⁽¹³⁾」ことを指摘し、「ベルクソンの歩みは常に不満足と批判から始まるのである⁽¹⁴⁾」という見解を述べる。この、ヴィエイヤール＝バロンの指摘は、ベルクソンのテキストのうち、どの部分を指しているのだろうか。それに該当する箇所が、『創造的進化』の第4章「存在と無」の小見出しがつけられたところに存在する。それは、「人間のあらゆる行動の出発点の不満足 [dissatisfaction] に、したがって、ある消失 [absence] の感情にあることに反論の余地はない」(EC 296-297) というベルクソンの力強い主張である。人間の行動の出発点が、不満足つまりある消失の感情にあることをベルクソンは指摘する。つまり、われわれ人間の行動は、完全にポジティブになにかをめざして開始されるわけではなく、自身のうちにあるネガティブな感情、消失の感情を出発点とするのである。

ここでは、一般的に人間の行動の出発点について述べられている。では、実際のベルクソン彼自身の哲学的方法はどうだったのか。「この哲学のやり方に対して、私の哲学的活動の全部は一つの抗議 [protestation] であった」(PM 98) と、自身で語っている。

ベルクソンが言う「この哲学のやり方」とは、この部分の直前に書かれている「純粋な弁証法の哲学、つまり言語のなかに貯えられた要素的な認識にたよる形而上学」(PM 98) の方法である。やはりここにおいても、ベルクソンは弁証法を批判し、ある種の言語批判⁽¹⁵⁾を行っていることがわかる。

弁証法や(表現する)言語でもって行う哲学に対する抗議として、ベルクソンの哲学が始められたことからわかるように、ベルクソンが批判する否定的なものは弁証法ではあっても、抗議という否定的・批判的なものではない。

ベルクソンの哲学も、既存の哲学に抗議することから始められた。これはなにを意味するのだろうか。前稿でわれわれは、「否定」の持つ直観的力についてのベルクソンの記述を検討した。「抗議」としてのベルクソン哲学は、哲学者の

耳に non と囁くあのダイモニオンのもののように、まずはある哲学に non と主張することによって、そこから自らがめざす哲学、そしてめざされるべきである哲学を「創造する」のである。あるいは、障害（既存の哲学）をたんに否定してしまうことによって、そこから新しい哲学が開始されるようにするのである。

ベルクソンは、ポジティブなものを目指しながらも、自身が哲学を語るときに、どうしても他の哲学を批判的に語らなければならない場面に出くわす。批判的に語るということは、哲学において重要な要素ではあるが、批判は常に否定を伴わざるをえないことも無視できないだろう。自身が語ろうとする哲学を肯定的に主張するだけでなく、斥けたい哲学・哲学的方法を否定しなければならないことがあるだろう。

しかし、ここで注意しなければならないのが、ベルクソンがかつての哲学のやり方に対して、抗議し、そして自分がめざす真の哲学的方法を立てようと試みることは、決して弁証法的な対立ではないということである。ベルクソンは、かつての哲学的方法に対立するものとしてベルクソンが自身の哲学を立て、そこから統合する形で新たな哲学を始めようとしているわけではない。そのような弁証法的な対立、弁証法的な否定によって既存の哲学に抗議したわけではなく、前稿で確認したような単純な否定によって、彼の哲学は始められたのではないだろうか。

たとえば、ベルクソンが言語を批判し、記号なしに哲学しようと試みる場合、一見すると彼は矛盾したことを主張しているように思われるかもしれない。しかし、言語を否定することによって暗示されるものが何であるかを、われわれは汲み取らねばならないのである。言語批判と思われる記述を文字通りに読み取ってしまうことによって生じる誤解を斥け、言語を否定することによって彼は何を暗示しているのかを受け取らねばならない。実際にベルクソンは、哲学における言語の役割を語る時、言語によって表現するのではなく、真の解決方法を暗示することが重要であると示している。

しかし、ベルクソンは暗示することを言語に割り当てて哲学を語っていると、われわれがそれを「表現された」ものとして読んでしまえば、そこにはたしかに誤解が生じてしまうであろう。ヴィエイヤール＝パロンが言うよ

うに、「ベルクソンの方法の否定的な諸側面は本質的なものである」ことと、「ベルクソンの歩みは常に不満足と批判から始まる」ことを念頭に置きつつ、これら不満足や批判といった否定的側面が暗示することを「ことごとく経験する」(PM 290) ことがわれわれには求められているのではなかろうか。

おわりに

本稿では、現に働いている否定的な力を考察した。第1節では「反自然」と呼ばれるものを、第2節では「抗議」と呼ばれるものを論じた。ベルクソンにおいて、反自然は、「民主主義」と「愛徳」からなり、自然が要請した「閉じた社会」の条件を超えるものであった。そして、現在最も自然からかけ離れている政治思想である民主主義は、まずは社会に対する「抗議」のかたちで現れたのである。また、ベルクソンの哲学自体も「抗議」として出発しており、ベルクソン哲学の否定的側面も明らかになる。

ここで、前二稿での検討の成果をも振り返りながら、ここまでのわれわれの検討の結果をまとめておこう。

まず前々稿においては、「否定」についてのベルクソンのよく知られた否定的評価の実際の中身について確認した。その結果、ベルクソンが「否定」なるわれわれの営みに対して下す否定的評価の理由は、「否定」と「実在」との関係の仕方のうちに求められるということがわかった。「否定」は、「実在」のうちにある論理に忠実なもののように自らを見せかけつつ、多くの場合、「実在」に直接触れていなかったり、「実在」から遠ざかる営みであったりする。そこにベルクソンは警戒を促すわけである。

またわれわれは前々稿において、ベルクソンの見る「否定」が他者との関係を含むものであること、社会的、教育的意味を持つものであることも確認した。当該の考察が示された『創造的進化』の第四章では、「否定」の持つこの要素は、「否定」が事象そのものに即した操作ではなく一種の対人論法であることを示すものとして、どちらかと言えばまさにネガティブな要素として扱われているのであるが、われわれとしてはそこに、むしろ「否定」のポジティブな側面を予感したのであった。

そして本稿では、ベルクソン哲学自身が「抗議」として否定的性格を備えていることを確認したのだが、否定が他者を前提としていることを考えると、否定的側面を有するベルクソン哲学は、自ずと他者を前提としていることがわかるだろう。ここで、ベルクソンの哲学には、「否定」と「他者」が欠如しているという従来の解釈は、誤ったものであることがわかる。否定が、実在を捉えていないという点では批判されるが、否定するときには他者の存在を前提としており、そこには社会的なものがある。そして、社会で働いている否定の力としては、「反自然」と「抗議」とがあり、どちらに対してもベルクソンはポジティブな価値を与えている。

またわれわれは前稿において、ベルクソンが「否定」に与えているポジティブな価値評価について検討した。ベルクソン哲学のこの側面については、これまで相対的に注目されることが少なかったのであるが、ベルクソンの著作から言葉を拾って注意深く検討した結果、一見意外にも、ベルクソンは、場合によって「否定」を「直観」と密接に関わるものとして捉えており、こうして「実在」の直接知としての直観に関わるものであるかぎり、で、「否定」を積極的に評価している、ということがわかってきた。

また、このような「否定」の積極的評価は、ベルクソンにおいては、「言語」の積極的評価、すなわち、実在の直接知には馴染まないものとして批判される「表現」としての言語ではなく、表現されぬ実在を指し示す「暗示」としての言語の積極的評価と密接に絡んでいる。これについてもわれわれは前稿で検討を行い、「直観」に馴染む「暗示」としての言語使用の評価とその「表現」との差別化が、ベルクソンにおいて初期から一貫したものであったこと、また「暗示」が「他者」に関わる「否定」的な操作としての側面を持つことを確認した。否定と他者とは、暗示する言語の観点から考察しても、共に現れるものなのである。

こうして、従来の解釈によれば、ベルクソン哲学では専ら否定的に扱われていることがら、ないしは積極的な扱いに欠けることがらであるとみなされてきた「否定」、「他者」、「言語」が、「否定」を中心にこれらのことがらを経巡ってきたわれわれの検討を通じて、それぞれベルクソン哲学の本質にも関わるものがらとして、相互の連関のもとに現れてきた。

次稿において、われわれは、前々稿から本稿までにベルクソンの否定における問題を考察するうちに浮上してきた、他者の問題と暗示する言語の問題を考察してみたいと思う。そこでは、「差異」を手掛かりに、ベルクソンにおける他者性の問題を考察することを予告しておこう。

註

- (1) 本稿は、筆者の修士学位論文「ベルクソンと否定の問題——暗示する言語と他者——」(2015年3月、成城大学大学院文学研究科にて学位取得)の「第3章」に若干の加筆・修正を施し、一論文として体裁を整えたものである。

なお、ベルクソンの主要著作及び書簡集からの引用は、以下の略号とページ数とを以て出典を示す。また、主に参照した邦訳を [] 内に記す。

DI : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, 2013 (1889). [アンリ・ベルクソン、中村文郎訳『時間と自由』岩波書店、2001年]

MM : *Matière et mémoire*, PUF, 2010 (1896). [アンリ・ベルクソン、合田正人・松本力訳『物質と記憶』筑摩書房、2007年]

EC : *L'évolution créatrice*, PUF, 2009 (1907). [アンリ・ベルクソン、合田正人・松井久訳『創造的進化』筑摩書房、2010年]

ES : *L'énergie spirituelle*, PUF, 2009 (1919). [アンリ・ベルクソン、原章二訳『精神のエネルギー』平凡社、2012年]

DS : *Les deux sources de la morale et de la religion*, PUF, 2012 (1932). [アンリ・ベルクソン、森口美都男訳『道徳と宗教の二つの源泉 I』『道徳と宗教の二つの源泉 II』中央公論新社、2003年]

PM : *La pensée et le mouvant*, PUF, 2013 (1934). [アンリ・ベルクソン、原章二訳『思想と動き』平凡社、2013年。河野与一訳『思想と動くもの』岩波書店、1998年]

C : *Correspondances*, PUF, 2002.

- (2) 以前の議論については下記の2論文を参照。

高坂絢乃「ベルクソンと否定の問題 (1)——否定の否定」『AZUR』成城大学フランス語フランス文化研究会、2018年、87-105頁。

高坂絢乃「ベルクソンと否定の問題 (2)——否定と直観」『AZUR』成城大学フランス語フランス文化研究会、2019年、95-118頁 (DOI : https://doi.org/10.32293/azur.20.0_95)。

- (3) 講義録はベルクソンの著作そのものではないが、2016年に出版されたコレージュ・ド・フランスの講義録 (Henri Bergson, *Histoire de l'idée de temps. Cours au*

Collège de France 1902-1903, 2016, PUF, p60. 邦訳は、藤田尚志・平井靖史・岡嶋隆佑・木山裕登訳『時間観念の歴史：コレージュ・ド・フランス講義 1902-1903年度』書肆心水、2019年、p.65)には、「自然に反する努力（〔un effort qui est contre nature〕や〔un effort contre nature〕）」という表現が記されている。

この講義録は、以前に公刊されたものとは異なり、講義に忠実に採られた速記録に基づくものなので、ベルクソンの講義そのものを高い精度で再現していると考えられる。該当箇所は1902年12月19日に行われた「第3講 一般観念の起源」の一部である。この日の講義全体としては、記号や概念について、その一般性や行動誘導性等について詳細に論じられている。なかでも、この「自然に反する努力」について言及されているのは、哲学とはどうあるべきであるか、とベルクソンが語っている箇所の一部であり、「必要な迂回でした」と締めくくられる補足的な部分でもある。しかし、「哲学するとは、通常そう言われるように、より多くの強度をもって思考することではありません。（…）それは反対方向に思考すること。自然の傾向に逆らわねばならないのです」と、述べられ、『思想と動くもの』の「形而上学入門」等で提示されているベルクソンの哲学観とも共通する、注目に値する部分である。

1903年の「形而上学入門」では、「知性の通常の働きを転倒させる〔un renversement du travail habituel de l'intelligence〕」（PM 198）という表現や、「形而上学が可能であるとすれば、それは思考の自然の坂道を登り、精神をふくらませて、自分の学ぶものなかにただちに身を置き、概念から実在へではなく、実在から概念へ進む努力によるものでしかありえない〔elle ne peut être qu'un effort pour remonter la pente naturelle du travail de la pensée〕」（PM 206）、「哲学するとは、思考の習慣的な方向を逆転することである〔*Philosopher consiste à invertir la direction habituelle du travail de la pensée*〕」（PM 214、強調はベルクソンによる）と、哲学の反自然的な性格について、繰り返し述べられている。

- (4) また、『道徳と宗教の二源泉』では、類する表現として、「反自然的な特徴〔un caractère antinaturel〕」（p.5）という表現もある。ここでは、社会的秩序が自然的秩序の様相を帯び、反社会的な行為は反自然的な〔antinaturel〕性格を持つことになる、という文脈で、「反自然」について言及されている。
- (5) 『二源泉』の「第4章 結びの考察—機械化と神秘精神」ではより分かりやすくまとめられている。「閉じた社会とは、その成員が相互に支え合いながら、自分たち以外の人間には少しも顧慮を払わず、たえず他を攻撃するか、自らを防衛するかの態勢にある社会、要するに成員がひたすら戦闘態勢を強いられている社会である。人間社会も、自然の手を離れたばかりのものでは、こうした閉じた社会である」（DS 287）。「開いた社会とは、原理上、全人類を包容するような社会である」（DS

- 288)。
- (6) 「愛」という言葉に関しては、ベルクソンは二種類のフランス語を用いている。基本的には、*amour* という語を用いるが、DS 34等においては *charité* を用いている。Henri Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932, G. Waterlot, F. Keck 校訂の PUF2012年版では、*charité* は、キリスト教神学的な意味のなかで使われており、*amour* の同義語であることが註に書かれている。(p.388)
- (7) Cf. DS 34-35.
- (8) Cf. DS 28.
- (9) 石井敏夫『ベルクソン化の極北』理想社、2007年。
- (10) Cf. *ibid.*, p.170.
- (11) *Ibid.*, p.178.
- (12) Marie Cariou, *Bergson et Bachelard*, PUF, 1995, pp.72-73. (マリー・カリウ、永野拓也訳『ベルクソンとバシュラール』法政大学出版局、2005年、79頁)
- (13) Jean-Louis Vieillard-Baron, *Bergson*, PUF (Que sais-je?), 1993, p.102. (J.-L. ヴィエイヤール＝バロン、上村博訳『ベルクソン』白水社、1993年、121頁)
- (14) *Ibid.*, p.104 (邦訳124頁)
- (15) 高坂絢乃「ベルクソンと否定の問題 (2)——否定と直観」の第2節「言語とイメージ——表現と暗示」を参照。ベルクソンが哲学において批判しているのは「暗示する言語」ではなく、「表現する言語」である。